

自らよりよい学校生活を創造する子どもを育てる学級活動 —情報の可視化・操作化を生かした話し合い活動を通して—

Class activity to raise a child creating the school life that is better than oneself
— Through the talks activity that visualization, operation of the information
made use of becoming it in —

井手 則 男

Norio IDE

(福岡教育大学附属久留米小学校)

(平成25年9月30日受理)

要 約

他者との直接的なかかわりに煩わしさを感じ、地域のコミュニティーが成立しなくなったと言われる昨今において、子どもの生活の中でも他者とうまく関係をつくれなかったり、自分たちで目の前にある問題を解決することを避ける子どもたちがいる。また、指導面では多様な情報を生かし、よりよい解決策を見出すための方法が不十分であった。

そこで、本研究は、話し合い活動を中心に生活上の諸問題を話し合いで解決し、よりよい生活を築いていくために、自他が持っている情報を生かし、互いの思いを受け止め、互いに納得する解決案を考えることができるように、事前の活動、本時、事後の活動における情報の可視化・操作化のあり方をさぐることを目指して実践的研究を行うものである。

キーワード：学級・学校生活をつくる、情報の可視化・操作化

I 主題設定の理由

1 社会の要請から

グローバル化や情報通信技術の発展に伴い、人・もの・情報・様々な文化や価値観が国境を越えて流動化するなど、変化が激しく先行き不透明な社会である。また、都市化・過疎化の進行、家族形態の変容を背景として、特に都市部を中心に、地域社会等のつながりや支え合いの機能が低下し、地域コミュニティーが成立しなくなったり、他者との直接的なかかわりに煩わしさを感じたりする傾向にあることが指摘されている。このような社会を生き抜いていくためには、新たな社会モデルが必要となる。文部科学省は、平成25年6月に「教育振興基本計画」をだし、これからの教育の方向性を示した。それは、「知識を基盤とした自立、協働、創造モデルとしての生涯学習社会の実現」である。個人や社会の多様性を尊重しつつ、幅広い知識・教養と柔軟な思考力に基づいて新しい価値を創造したり、他者と協働したりする能力等が求められている。つまり、学習者自身が、生涯にわたり、自身に必要な知識や能力を認識し、身に付け、他者とのかかわり合いや実生活の中で応用し、実践できるような主体的・能動的な力が求められている。このことを受けこれからの特別活動では次のことを一層重視していく必要があると考える。

○一人一人の多様な個性・能力に応じ、学校生活を送るために必要な資質や能力を主体的に身に付け発揮することができるようにすること。

○多様な個性を持つ友達を尊重し、互いに支え合い高め合いながら互いの絆を深めることができるようにすること。

そこで、特別活動の基盤となる学級活動においては、よりよい人間関係を築き、楽しい生活をつくるなど、自分たちの学級や学校の生活の充実と向上のために主体的に参画し、進んで話し合い、協力して実現しようとする自主的、実践的な態度の育成と自己を生かす能力の育成が重視された。つまり、学級生活をしていく中での自分や学級の課題を自分たちで話し合うことを通して解決の方法を考えたり、友達と協力したり自分のよさを発揮しながら生活づくりに取り組んでいくことが大切にされてきている。

2 これまでの研究の歩みと子どもの実態から

(1) これまでの研究の歩み

特別活動部では、自らよりよい学級集団をつくる子どもを目指し、子どもの多様な考えを基に、よりよい解決策を決定することができるように、自他の思いを受け止め（情報の入力）自他の考えを比較し、より観点が合う考えへ（情報の加工、情報の出力）と高めることができるように情報分析シートを活用した話し合い

活動のあり方の研究を進めてきた。そこで次のような成果と課題が明らかになった。

- 本時の話し合い活動では、自分の考えの理由を明確にして主張するとともに、自他の考えを比較し、友達の思いを受け止めることができるようになってきた。
- 本時の話し合い活動では、付箋紙を活用しながら互いの考えを分類整理したり、付箋紙を操作して観点到に合う考えを見いだしたりすることができるようになってきた。
- 集団決定や自己決定をする場面で、自分の思いの実現や自分の課題を解決するために、ふさわしい考えはどれか不十分なまま決定する姿が見られた。
- 自分の思いやこだわりが強いため、友達の考えと十分に比較できなかったり、友達の考えのよさを生かしてよりよい解決策を見いだせない子どもたちもいた。

(2) 本校児童の実態から

子どもたちの学校生活に対する意識調査を右の表のように8つの項目で行った。

- ・調査日 平成24年7月
- ・対象 第四学年桜組児童 40名
- ・方法 質問紙による4段階評価

結果から分かるように、子どもたちは、友達とかかわりながら友達関係を築いたりみんなで話し合っ解決しようと頑張っていることが分かる。また、みんなが気持ちよく生活できるようにきまりを守って行動することの大切さを身につけていく必要ことが分かる。以上の研究の歩みと児童の実態から次の点を重視して指導していく必要がある。

表1 実態調査の結果

質問項目	1	2	3	4
①めあてを達成しようと頑張ることができる。	20人	12人	8人	0人
②友達のいいところを見つけようとする。	12人	15人	13人	0人
③友達の話をしっかりと聞くことができる。	21人	10人	9人	0人
④理由をつけて自分の考えを発表することができる。	20人	18人	2人	0人
⑤友達と遊んだり話したりして楽しい。	20人	18人	2人	0人
⑥友達が困っているとき助けることができる。	14人	18人	8人	0人
⑦学校のきまりを守って生活することができる。	12人	21人	7人	0人
⑧学習の約束を守って学習できる。	16人	12人	6人	0人

1・・・とても 2・・・まあまあ 3・・・あまり
4・・・まったく

- 自分で相手の思いをくみ取って行動したり、友達とのよりよい関係を築いたりしながら、友達との絆を深めていく資質・能力を高めていく。
- 話し合い活動では、観点を基にこの考えは適切かどうかを判断し、互いに納得する解決案を見出し自己決定、集団決定ができるようにする。

II 主題の意味

1 主題の意味

(1) 学校生活について

子どもたちが、友達とかかわりを通して、人間関係を学んだり、集団生活を送る上で必要な生活習慣や集団活動を進める上で必要な知識や技能を身に付けたりする場である。

子どもたちは、多くの他者とかかわりながら学級生活や学校生活を送っている。その中で、子どもたちは、共通の目標達成に向けて他者と協力しながら活動し、達成した喜びを分かち合ったり、他者のことを考え自分を律しながら集団生活をしていくための行動の様式やその大切さを学んでいく。そこで、図1のように学級生活を「人間関係」「自治的行動」「基本的生活習慣」の3つの視点から捉える。

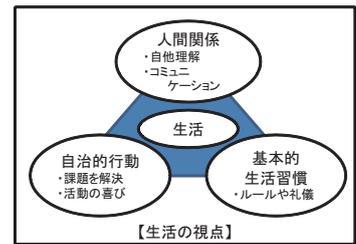


図1 学級生活の視点

【人間関係】…他者とのよりよい関係を築こうとコミュニケーションを図ったり、協力して活動に取り組んだりする。

【基本的生活習慣】…自分を律して行動することの大切さ、集団生活に必要な行動様式、決まりを守ることの大切さを学ぶ。

【自治的行動】…目標達成に向けて自分たちで解決すること、自分の役割を果たすこと、他者に貢献することの大切さを学ぶ。

(2) よりよい学校生活について

学級・学校生活の充実・向上をめざし、生活の中の諸問題を解決しながら、「人間関係」「自治的行動」「基本的生活習慣」を高めながら、子ども一人一人が生き生きと生活することに喜びを味わうことができる場である。

学級生活の充実・向上をめざし、学級生活の中の諸問題を解決しながら、友達と好ましい人間関係を築い

たり、自立した個を確立したりして、未来への展望をもち、子ども一人一人が生き生きと生活できることに喜びを味わうことが大切になる。よりよい学級生活の具体的な姿として次のように考える。

- 頑張りや目標達成等への意欲を生みだしたり、認め合ったりする潤いがある生活。
- 頑張った充実感、目標を達成できた効力感、最後までやり遂げた満足感がある生活。
- 友達やみんなと共に頑張ったり、目標達成したりする一体感、連帯感がある生活。

(3) よりよい学校生活を創造するについて

子どもたちが、当事者意識を持ち、生活上の諸問題に向けて友達と協働しながら活動し、活動したことを評価しながら、学級・学校生活を充実・向上させていくことである。

学級生活をつくっていくためには、生活上の諸問題を見出し、解決の方向性を共有する「思いを持つ段階」、友達とアイデアを出し合いながら解決策を見出す「計画する段階」、計画したことを基に、自分で努力したり、友達と協力しながら実践したりする「実行の段階」、実行したことを振り返り、活動での達成感を味わったり、次の活動への意欲を高めたりする「見つめる段階」を通していくことが大切になる。

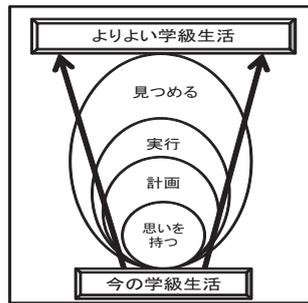


図2 生活を創り出す段階

(4) 自らよりよい学校生活を創造する子どもについて

生活の主体者である子どもたちが、学級・学校生活の中の諸問題を見つけ、その問題の解決に向けて友達と協働しながら活動し、活動したことを評価しながら、学級・学校生活を充実・向上させていく子どものことである。

そこで、目指す子どもは次のような資質・能力を身に付けた子どもである。

- 学級・学校生活の問題を解決するために、互いに知恵を出し合い、それぞれの思いを受け止め、よりよい解決策を考えたり、他者と協力しながら実践したりする子ども。
- 目標達成に向けて自分を律しながら行動することを理解するとともに、互いのよさを認め合うことの大切さを理解する子ども。
- 自分で解決したいという切実な思いを持ち、諸問

題を解決しようと企画したり、自分の役割を果たしたりして他者に役に立とうとする子ども。

2 副主題の意味

(1) 情報について

課題を解決していく際によりよい自己決定・集団決定をしていくために判断をしたり、行動を起こしたりする際に必要となる事実や状況、人間の思いや考えである。

よりよい解決策を判断し、自己決定したり集団決定したりするためには、必要学級活動では、自分の考えを変換したり、自分の考えを強化したり、自分の考えに付加したりするための情報が必要となる。そこで、学級活動では情報を次のように考える。

- 他者の思いや願いがつまった考え。
- 事実や状況を把握するための客観的なデータ。

(2) 情報の可視化・操作化について

互いの考えを「思考ツール」を生かし、目的に応じて互いの考えを分類したり、比較したり、関連づけたりしながら、その考えにある思いや願い、価値観を捉えることである。

学級活動は、図3のように「他者の思いや願いがつまった考え」のやりとりを通して、他者の思いや願いを受け止め、互いに納得する解決策を見出していくことが大切になる。ただ単に言葉のやりとりだけでなく、他者の考えの根拠や活動に対する思いを理解するとともに、互いの気持ちが通じ合うことが大切になる。そのためには、図3のように他者からの情報を言葉を通して入力し、他者の考えを解釈していくためには、互いの考えを可視化したり操作したりして共有していくことが大切になる。

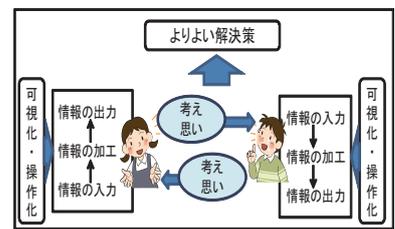


図3 子どもの情報のやりとり

(3) 情報の可視化・操作化を生かした話し合い活動について

課題を解決するために、互いの考えを思考ツールを使い、分類したり、比較したり、関連づけたりしながら互いの思いを受け止めながら、互いに納得する解決策を見出し、自己決定、集団決定していく集団的思考である。

話し合い活動は、事前の活動、本時の活動、事後の活動を一連の活動としている。そこで「情報編集力の育成」という視点から話し合い活動を考えると、下の図4のように捉えることができる。



図4 話し合い活動と情報編集力

事前の活動は、生活上の中の問題は何か他者から情報を集めたり、試しの活動や自分の生活の現状からデータを集めたりする「情報の入力」である。本時の活動は、他者の考えを解釈したり、他者の考えと比較したり関連付けたりして新たな考えを創造し、自己決定、集団決定するための「情報の加工」である。事後の活動は、見出された解決策を日常生活で実践したり、実践を通して得られた思いや願いを表出していく「情報の出力」である。そこで、話し合い活動における「情報編集力」を情報の目的、内容、方法から考える。

各活動	情報の目的	情報の内容	情報の方法
事前の活動 (情報の入力) 生活の中から現状を見出し事実の共有化が可能になる。	<input type="checkbox"/> 生活上の中から諸問題を見出す <input type="checkbox"/> 問題に対する自分の思いや考えをもつ	<input type="checkbox"/> 学級生活における思いや願い <input type="checkbox"/> 学級生活への意識 <input type="checkbox"/> 学級生活や日常生活の現状 <input type="checkbox"/> 提案に対する思いや願い	<input type="checkbox"/> 現状を数値化 <input type="checkbox"/> 自他の思いを見える形に表出 <input type="checkbox"/> 互いの思いを調査
本時の活動 (情報の加工) 他者の考えの意味の共有化、考え方の共有化が可能になる。	<input type="checkbox"/> 他者の考えや考えの根拠を知る <input type="checkbox"/> 他者の考えと比較し、よりよい考えへと高め互いに納得する解決策を決める	<input type="checkbox"/> 他者の考え <input type="checkbox"/> 他者の考えの根拠	<input type="checkbox"/> 自分の考えの根拠を明らかにした資料 <input type="checkbox"/> 他者の思い分かる音声・映像資料 <input type="checkbox"/> 思考ツールを生かしたシートの活用
事後の活動 (情報の出力) 他者と心が通じ合い考え方の共有化が可能になる。	<input type="checkbox"/> 決定したことを表出する <input type="checkbox"/> 実践活動の成果と課題を振り返る	<input type="checkbox"/> 決定した内容 <input type="checkbox"/> 実践の映像資料 <input type="checkbox"/> 自己評価 <input type="checkbox"/> 実践活動における互いの思い	<input type="checkbox"/> 自他の思いを表出 <input type="checkbox"/> 現状を数値化 <input type="checkbox"/> 自己評価、他者評価の調査

本時の活動で、「情報編集力」が機能的かつ効果的に働くように、本時の学習過程の中に、自他の思いや考えを主張する「アピールタイム」とよりよい解決策を見出して「検討タイム」を位置づける。

そこで「アピールタイム」「検討タイム」の目的、内容、方法を次のように考える。

	アピールタイム	検討タイム
目的	他者の立場や考え、考えに対する思いを知るため。	自他の考えを比較、分類、関連付けながら、互いに納得する解決策を見出すため。

内容	議題に対する自分の立場とその根拠。 他者の考えに対する考えとその根拠。	自他の考えの共通点や相違点。 条件付けた考えや考えを付加したり修正したりした考え。
方法	自分の考えとその根拠を明確にして発表させる。 自分の考えと似ているか、違うか比較させる。 互いの考えを聞きながら考えを聞かせる。	ペアまたは小グループで考えを出し合う。 発達段階に応じて思考ツールを活用して話し合わせる。 互いの考えを生かして解決策を見出す。

「アピールタイム」を位置づけることで、議題に対する他者の立場や考えに対する思いや願いを知ることになり、他者の考えを入力することができる。

「検討タイム」を位置づけることで、自分と考えの異なる友達の思いを聞き、自分の考えを見直し、互いに納得いく解決策を見出すことができる。この2つを位置づけることで、互いの考えをつないだ解決策を見出すとともに、互いに心が通じ合うと考える。

Ⅲ 具体的構想

1 情報の可視化・操作化を生かした活動過程の工夫について

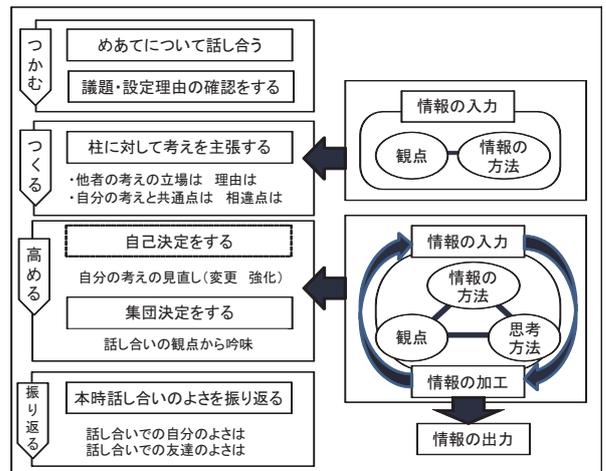
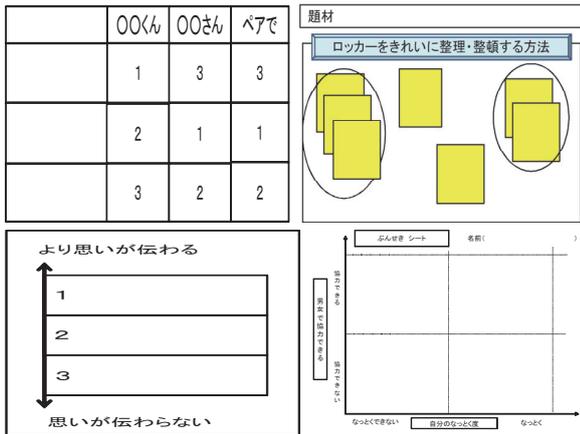


図5 共通事項(1)の本時の活動過程

図5は共通事項(1)における集団として意見をまとめるための話し合い活動の活動過程である。そこで、図5のように、つくる段階に「アピールタイム」、高める段階に「検討タイム」を位置づけ、他者の考えの立場や考えの根拠を解釈し、他者の思いを受け止める。集めた他者の考えを基に、再度自分の考えの見直しをする。最後に、思考ツールを活用しながら多様な情報を比較したり、付加修正したり、組み合わせたりしながら、観点に合った解決策を見出し集団決定をする。

2 情報を見える形に表出する工夫について

互いの考えを出し合い、よりよい解決策を考えていくには、互いの考えを可視化し、操作しながら共有していくために学びの積み上げをしていく。



【情報の方法】

互いの情報を分類整理するようなシートを活用したり、互いの考えを1つ又は2つの観点を基に、互いの考えのよさを見出したり、観点に沿ってよりよい解決案を見出すことができるようにする。

【思考の方法】

学級活動においては、互いの考えをつなぐための思考方法が大切になる。そこで、「比較」「分類」「関連」を重視していく。

- 比較：互いの考えの共通点や相違点を見出す。
- 分類：互いの考えを共通性からまとめ整理する。
- 関連：互いの考えのよさや新たな考えのよさを取り入れて、新たな考えを見出す。

【情報の観点】

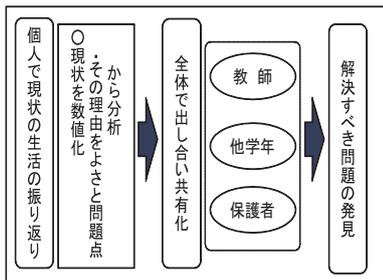
学級活動では目的性、相互性、現実性の3つの観点を手がかりに吟味し、よりよい情報を創り上げていくことが大切である。

- 目的性：課題を解決するための活動かどうか。
- 相互性：自分も他者も納得いく活動かどうか。
- 現実性：自分たちで実行可能かどうか。

3 教師の具体的な支援について

(1) 問題設定の工夫について

学級活動で扱う諸問題は、子ども自ら見出すことができるようにしなければならない。そして、子どもが共有化しなければならない。そこで、現状の生活についての振り返りを数値化し、よさと問題点を分析したりする。そして、全体で話し合い共有化する。また、教師や他学年、保護者といった他者からの情報を基に

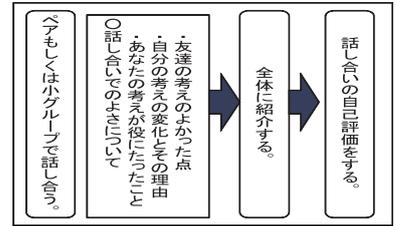


解決すべき問題を見出すことができるようにする。

(2) 振り返りの工夫について

① 本時における振り返り

子どもたちが情報を活用を実感する場面は、本時の話し合いの場面である。そこで、図7示しているように話し合いでのよさを相互評価する場を設定する。そして、相互評価したことを全体で紹介する。全体で紹介することで、次の話し合いに生かすことができる。



② 議題における振り返り
実践を通して得た成果と課題を次の活動につないでいくことで学校生活の向上につながる。実践後の成果と課題を話し合い、次の活動につないでいく。

IV 研究の実際と子どもの姿

1 本議題の計画

第四学年桜組 議題「4の桜学級文化祭を開こう」 計画（3時間+課外）
--

	< 事前 > 自分の考えをつくる活動	< 本時 > 集団決定のための話し合い活動	< 事後 > 実践・評価活動
	課外	第1時（本時）	第2時+課外
主眼	試しの活動や調査活動を通して情報を収集し、自分の考えをまとめることができるようにする。	議題「4の桜学級文化祭で何をするのか決めよう」について話し合い、文化祭でする活動を決めることができるようにする。	友達と協力したり自分の役割を果たしたりして活動し、実践のよさと課題を振り返ることができる。
学	1 学級テーマについて振り返り、活動の見通しについて話し合う。 【今の4の桜のよさ】 ・友達と協力できるようにした。 ・思いやりの言葉をかけられるようになった。	1 活動の目的を確認し、本時話し合いのあてについて話し合う。 学級文化祭でどんな活動をするのか話し合って決めよう。 議題【4の桜学級文化祭の決め方】 2 自分の意見を出し合い、互いの意見を基に自分の考えを整理する。 【グループ話し合い】 目的性 相互性 現実性	1 制作物の内容や役割分担について話し合う。 制作物の内容や文化祭に必要な役割を決めよう。 ・制作物・テーマの明確 ・役割・進行 飾り 友達と協力したり、文化祭を盛り上げたりする係に決まった
習	【もっとよくするには】 ・友達と協力する。 ・できることを増やす。	3 観点を基に活動を吟味し、集団決定する。 目的性：自分たちでつくりあげる	2 決まったことを基に文化祭の準備をする。 ○グループ発表の練習や個人発表の練習をする 3 4の桜学級文化祭を行い、活動を振り返る。
動	4の桜学級文化祭	2 議題についての自分の考えをまとめる。 ○調査活動を行い情報を収集する。 ○情報を基に、根拠を明確にして自分の考えを整理する。	3 みんなで協力して4の桜の学級文化祭を成功させよう。 ○友達と協力したり役割を果たしたりして活動する。 自分たちで文化祭を盛りあげることができた。自分や学級のよさが増えた。
評	・原案について、理由を明確にして自分の考えを持つことができる。(表)	・話し合いの観点を踏って活動を判断して、学級文化祭でする活動を決めることができる。(思)	・自分の役割を果たし、男女で協力して実践することができる。(実)

図8 本議題の流れ

2 本議題のねらいと活動内容

(1) 本議題のねらい

学級目標 自分のよさを生かし友だちとのかかわりを深める子		
かかわりをつくる	かかわりを深める	かかわりを確かめる
【 個 】 学級や個人の目標に向けて行動したり、自分の役割を意識して行動したりして、所属感を味わう。	【 個 】 学級目標達成に向けて互いに協力したり、自分の役割を果たしたりして行動し、連帯感を強める。	【 個 】 自分のよさや生活での充実感を味わうとともに、新学年への期待を持つ。
【 集団 】 互いを知り仲良くなるとともに、互いのよさに気づき、かかわりをつくらうとする。	【 集団 】 友達との結びつきが強くなり、相互理解を深め、自他のよさを認め合おうとする。	【 集団 】 1年間の自他の成長や集団の成長を確かめ合い、互いに高め合おうとする。

2学期は重点目標「かかわりを深める」の具現化を図っていくために、学級目標の達成に向けて自分の役割を果たしたり、互いに協力したりして活動し、自己理解・他者理解を深め、互いのよさを認め合うことができるようにする。

学期での学級集団の高まりを、学級の形成期、学級の定着期、学級の充実期と3つの段階で捉える。そこで、学級集団の高まりと集団活動の高まりとの関係を

		○他者に役立つ活動
		○文化を創造する活動
		○組織やきまりをつくる活動
		○親和的な活動
形成期	定着期	充実期

図9 学級集団の高まりと集団活動

図9のように考える。形成期は、親和的な活動や組織やきまりをつくる活動を重点に、定着期は、組織やきまりをつくる活動や文化を創造する活動を重点に、充実期は、他者に役立つ活動、親和的な活動や文化を創造する活動を重点に考える。以上のことを踏まえ、本議題のねらいを次のように考える。

学級生活を楽しく豊かにするために、互いに協力したり、自分のよさを発揮したりして活動することを通して、自他のよさを認め合うことができるようにする。

(2) 本議題の活動内容

本議題は(1)ーア、学級や学校における生活上の諸問題の解決に関する内容である。

本議題「4の桜学級文化祭を開こう」における学級の生活上の諸問題は、「学級生活を豊かにする文化的、創造的活動に関する問題」に取り組むことである。

【学級文化を創造する活動について】

子どもの興味・関心に基づき、学級全員で同じ目

標に向かって活動し、共通の価値観を得る活動。

そこで、学級文化を次のように捉える。

- 価値文化として・・・学級の旗、学級の歌のように形に表せるもの。
- 活動文化として・・・学級の財産として、みんなで取り組み、自信を持つことができた諸活動。

この学級文化を創造する活動を充実するよさとして、次の点がある。

- 自分のよさを発揮して、学級の文化を創り出すことができる。
- 友達と協力したり、自分の役割を果たしたりして活動することができる。

【学級生活の充実・向上について】

本議題では生活の充実と向上を次のように考える。

【学級生活の充実】

2学期の重点目標の達成に向けて、4の桜学級文化祭での活動内容を話し合ったり、友達と助け合いながら活動したりすることができる。

【学級生活の向上】

4の桜学級文化祭をしように向けて、小グループの友達と協力したり、自分の役割を自覚し果たしたりすることで、互いのよさを認め合うことができるようにする。

以上のことから本議題では次の活動を考える。

- 学級文化祭の企画における話し合い活動。
 - ・一人一人の興味や関心に基づき自分のよさを発揮できる活動であること、友達と協力しないとできない活動になること。
- 企画したことを基に実践する活動。
 - ・自分の役割を果たしたり、友達と協力したりして実行することができる活動であること。
 - ・自分のよさを発揮するとともに、互いのよさを認め合うことができる活動であること。

3 授業の実際

(1) 事前の活動

学級生活を振り返り、自他の思いを共有し活動への共通理解を図り、活動の見通しをもつことができるようにする。

前時では図10にあるように、今の学級について、個人の振り返りを基に学級としての現状を振り返った。

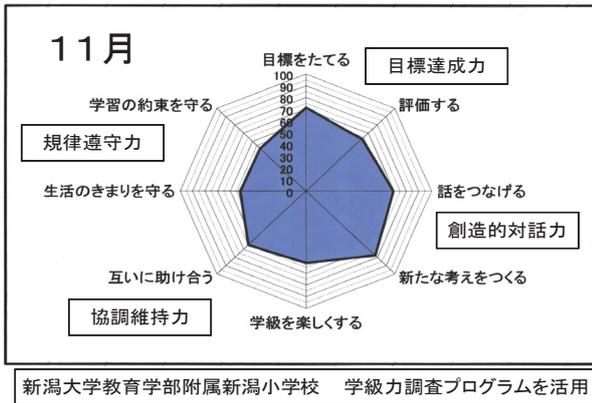


図 10 11月の学級の振り返り

この結果について全員で話し合い、「互いに評価する」「互いに助け合う」「学級を楽しくする」ことを高めていくことが4年校組の課題として共通理解された。そして、これらを高めて活動として原案グループと話し合い、学級の文化祭をしようということに決まり、学級文化祭でどんなことをするのか話し合うことになった。

個人のアンケートを基に、学級に対する全員の思いを数値化することで今の学級の課題を明確にすることができた。このことで、子どもたちが「自分たちで何かをつくりあげたい」「協力したい」「互いのよさを認め合いたい」という思いを共有し、活動の目的を共通理解することができた。

(2) 本時の活動

① 本時のねらい

- 1 学級文化祭でする活動を、友達と協力して取り組むことができたり、互いのよさを生かしたりしながら、自分たちでつくりあげることができる活動に決めることができるようにする。
- 2 考えの相違点から解決案を話し合ったり、友達と協力でき、自分のよさを生かせる、互いに納得できる、自分たちでできる、という観点から話し合ったりすることができるようにする。

② 本時活動の立場

- 【アピールタイム】
- 自分が賛成している理由を、目的性、相互性、現実性の観点から明確にして主張する。
- 【検討タイム】
- 小グループで原案の気になる点を出し合い、分析シートを活用して解決案を見出す。
 - 小グループで2次元表を活用し、解決策を観点から比較し合い吟味する。
 - 全体で話し合い解決策を集団決定する。

② 本時の活動過程

本時の流れ	学 習 活 動	具体的な手立て
つかむ	1 話し合いの目的を確認し、学級文化祭でする活動を決定していくという本時学習のめあてについて話し合う。 ・友達と協力して文化祭をしたい。 ・私は、みんなのよさが分かる文化祭にしたいな。 友達と協力できて自分のよさを生かせるような4の板の学級文化祭でする活動を決めよう。	○話し合いの目的を明確に持つことができるように、活動に対する自分の思いを出し合わせ、活動の目的を確かめさせる。
つくる	2 議題「学級文化祭で何をするのか決めよう」について話し合う。 (予想される話し合い) ○自分の考えを主張し、出された意見を基に自分の考えを整理する。 【グループ発表】【よさ・得意発表】【作品展示】【お 店】 目的性：協力できて自分のよさが生かせる 相互性：自分も友達も納得 現実性：時間内にできる	○自分の考えの理由を明確にして発言できるように事前に自分の考えを持たせておく。また、話し合いのどの観点から賛成・反対しているのか捉えることができるように色カードを貼りながら板書させる。
高める	3 観点を基に吟味し、活動を集団決定する。 ○グループで、目的性、相互性、現実性の観点から考え、解決案を話し合う。 ・よさ得意発表は、発表が恥ずかしいなら、よさの同じ人とグループになって発表するにしたい。 ・よさ得意発表で、時間が足りないなら、お店とするという。 ○解決案を出し合い、活動を集団決定する。 【よさ・得意紹介】 【お 店】 一人じゃ恥ずかしいならペアやグループに ・お店の内容をよさや得意なことが分かる内容に ・発表とお店のどちらかを選ぶように ↓ 解決案を基に集団決定 友達と協力したり、自分のよさを発揮したりしながら、自分たちでできる活動に決まった。	○解決案を見出すことができるように、反対意見の理由から、目的性、相互性、現実性に合う活動を考えさせる。 ○集団決定することができるために、出された解決案を2次元表を活用して比較させ、より目的性、相互性に合う活動を決定させる。
振り返る	4 話し合いの自己評価や相互評価、教師の話を基に、話し合いを振り返り、決定したことを実践している意欲をもつ。 ・これから文化祭に向けて協力していこう。 ・自分のよさを生かして文化祭を成功させたい。	○自己評価の観点を明確にし、話し合いでのよさや活動への期待感を記述させる。

図 11 本時活動過程

③ 本時学習の展開

【つくる段階・・・アピールタイム】

アピールタイムでは、「グループ発表」「作品展示」「よさ得意発表」「お 店」のどの原案に賛成なのか、各原案のよさを理由として主張した。そして賛成のよさがどの観点から分かるように、板書で色カードで整理した。その後、各原案について自分が気になる点について出し合った。「グループ発表」「よさ得意発表」「作品展示」について気になる点が出され、解決案を考えていくことになった。

【高める段階・・・検討タイム】

○小グループでの解決案を見出す

写真のように子どもたちは小グループでそれぞれの原案の気になる点を基に、それを解決するために解決案を考えた。



「よさ得意発表」はみんなの前で発表するのは恥ずかしいという点を解決するために、「何人かでグループを作って紹介」「作品展の中で紹介」というような解決案が考えられた。



○2次元表を活用し解決案を吟味

出された解決案を、写真にあるように小グループで付箋紙を活用しながら吟味していった。2次元表を活用し、友達と協力しよさを生かすという目的性、自分も友達も納得という相互性の観点から吟味をおこなった。



○2次元表を活用して解決案を全体で吟味

グループで考えた解決案を全体で出し合った。「よさ得意発表」は発表の仕方として発表するか、みんなの前で発表するか選択するというように互いに納得いくように決定することができた。



図 12 本時学習ノート

図 12 のように話し合いを振り返った。本時の話し合いで、自他の頑張りをみつめたり、これからの自分が頑張ることをまとめ、学級会の最後に発表した。

以上の子どもたちの活動のようすから、「アピールタイム」「検討タイム」を位置づけ、互いの考えを可視化したり、可視化した考えを操作したりしたことで、互いの思いを受け止め、自他ともに納得いく解決案を見出し集団決定をすることができたと考える。

(3) 事後の活動

- 決めたことを基に、友達と協力しながら準備をしたり、自分の役割を果たしながら学級文化祭を行うことができるようにする。
- 実践したことを基に、振り返りを行い学級としての成果と課題を共有する。

① 実践活動

学級文化祭当日まで、子どもたちはそれぞれのグループに分かれ、発表の練習をしたり、お店の準備をしたりと友達と協力して活動するこ



とができた。

学級文化祭当日の「お店」では、将棋が得意な子どもたちが集まり、将棋の指し手を紙に書いて準備したり、将棋を楽しんでもらおうと将棋体験コーナーを設け、自分のよさを生かして活動することができた。

② 振り返り活動

図 13 のような振り返りシートを活用し、議題を通して子どもたち自身がどんな資質・能力を身につけたか分かるようにした。この得点の平均を全体に提示し自分たちの活動で学んだことを共有化した。

活動後、

図 14 のよう

に自分の現状を数値化し、よさと課題を振り返った。そして活動での学びをまとめた。そして、一人一人の振り返りを基に、数値化し学級としてのよさと課題を明らかにした。

図 13 振り返りシート

図 14 活動後の振り返りノート

V 終わりに

互いの情報を可視化し、操作化したりするアピールタイムと検討タイムを位置づけたことで、互いの思いを受け止め、より納得いく解決案を決定することができるようになった。

今後は、明確に自己決定できるような話し合いの仕組みを考える。

<引用・参考文献>

- 文部科学省「小学校学習指導要領解説特別活動編」平成 20 年 東洋館出版社
- 附属久留米小学校「協同的な学び合い」をつくる言語活動 平成 23 年 明治図書